

京都市右京区 笹井ます子（86歳）

【私の子どもだった頃】

昭和20年3月、10歳の私は、8歳の弟と4歳の妹とともに岡山県津山市の母の実家へ疎開をした。生まれて初めて親と離れ、知らない土地での生活は寂しかった。その年の3月には大阪大空襲があり、京都にいた時は警戒警報が鳴るとすぐに下校、空襲警報のサイレンが鳴るとすぐに下校はできず、机の下にもぐり込み動けない。夜は電灯にふろしきをかぶせて暗い中で寝ていました。

津山に行っても「よそもん！」と言われ、食べ物もなく辛い毎日でした。そんな生活を送る中、夏休みの8月6日の朝に祖母と丘の上の段々畑へ行った時、空が急に暗くなり、真っ黒な大きな雲が頭の上に覆って大粒の黒い雨がザーと降ってきた。私は祖母に抱きつき動けなかったことを忘れることができません。

「よそもん、よそもん」といじめられ京都の母が恋しく、裏山から鉄橋を走る汽車ポッポを眺め、泣いている妹の手を握りしめて泣きました。

今、平和な生活があたりまえの子どもたちに、二度とあのような寂しくて辛いめをさせないためにも、平和の願いを込めたいと望んでいます。